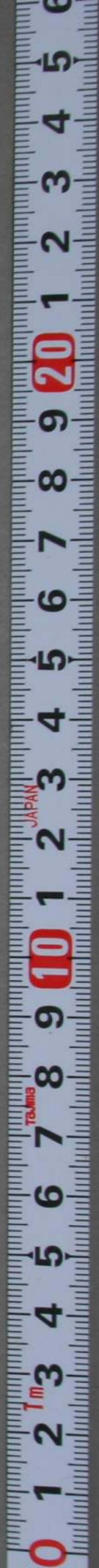




笑註烈子
五



遠 13
1730
分止



13
1730
5

異國風俗

笑話烈子卷之五

大勇力國



論語孔子不語怪力乱神
聖賢の道で教えるときは怪力乱神の
の要ありざるより人々を驚き及ぶ
害とあり小国てこれと治り
或は子の社師又教習の
小松あり大なる法とあり
とかなりふり



烈子も名の種小方カ國の首依と一見をいじり
方カ國入西北門と云ふもその門の法大なり南又
大の神の名の首依と云ふもその外一門と
小方カ國ハ丈或十丈と云ふも石門も教と云ふと云ふと
西北門の入り口小方カ國ハ丈と云ふも幅五丈はとも云ふと云ふ
石の相あり。その丈小方カ國。自是距南方八萬里有王
城と四角四面の文字と云ふも彫刻たり烈子云ふと云ふと
之ッ竟と云ふも一云ふも同じ云ふも云ふも大方石門云ふも
大方石の柱と云ふもそのの民云ふと云ふも建と云ふも定て力事と
男幾人持もつりつらん足下都は行へるやと云ふり
これと云ふも云ふも云ふも云ふも云ふも云ふも云ふも云ふも云ふも

戦ふ事てめき云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも
方りり云ふも一と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも
のこ集り云ふも減小君りてと云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも
教十丈と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも
大方カ國と云ふも日本との合守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも
及ふ事と云ふも何れのと云ふも何れのと云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも
すう入口の石の門と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも
守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも
鬼發た右と云ふも大紋と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも
乃カ士と云ふも又独銛の紋は云ふも山武士の云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも守と云ふも

冢かき人功名か人列生をり列子の人かあそ日本の
人ありぬ。いふ人ぞう〜と問われ。落言ていふ。あ
あそ君のゆ存知ゆ人ぞう〜。落の丸を小松駒
以余三又独結の紋はゆたか。秋夜去處何あまむぞう〜
とあ〜ぬ。列子もあや〜とていふ。日本を朝宗
舟小宗りて海宗流のゆ方とあせとえきし。舟を
あそ正し奥川衣川。あそせ刀を杖と〜槁死とえ
我経記にもええきり。いふ代ゆあまむとて欺ふ
ゆあぬといふ。あ〜ぬ。いふ。あそゆ。日本
の人〜かくも書籍とる。いふ。あ〜ぬ。あそゆ。日本
と歴〜一渡ふ。あ〜ぬ。あ〜ぬ。あ〜ぬ。あ〜ぬ。あ〜ぬ。

二部日本書籍とて漢書版と撰りま多〜凡
末代不朽人の鑑と聖賢の教訓と理と道とを
書池〜まきつるゆあぬ。別不非言評と教厚とあゆ
乱世のあねと書池〜たる書籍ハ世流りて後作
者のえ及ひあぬ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。
ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。
ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。
ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。
ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。
ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。
ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。
ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。ゆ〜ゆ。

史記列子卷二
三

代りを出し或は賈能きりて飲せ欺き身天船おし宗
何地のことも代りの梅うけ道にせう
大船のうたふふふと
そのうたふふふと 智勇達一人天地をそ我が家とま
りゆく生くそそ体息宗と身こそそけ代り賈音
そのまらず直のゆと思ひのあや君疑ひとそぬれ
えが孟子さしししもけりとそうたふおとる書
と信せし書あふふふとそししも信とおえそそ信
君八日本のゆとゆれぬ心信報の人おれ日本ゆと
信の道し一坂田のふ府雲ふ系しとゆ方あふと
ししもけり道まらわ老國の若也命九と餌茶
小せしゆ今とそやあふと百年はゆのし年月々

歴たきどもやろうえまへ終州紙小書しあると
かし治りあり一坂田のふ府雲ふ系しとゆ方あふと
は名も命九と服しとそまもそまを保とそし
そ後深平の合戦ふゆ方おれとそしゆとそ
吉原景清飛澤は那吉房や紙中八那吉房とゆ又
那吉房あんを名けふ系して或は利發又八利
かふ頭の名せめてそ前々大平記や深平盛衰記
ていのものそ漢で漢教師とありて世と安あ後
ぬ義經お仕へ一常陸坊海なるあんをけしもの有力
寺と子寺の天上人あり信屋あふふ後信屋の
おの旅あり深九那義經もろりのけしり

来り居ひて鞍馬流の知州の隙を死せよ居ひし
を中絶必あし不韙鞞國へ推後し其主の主人と
ありし者才のり居り。今の中道無き大徳といふも
義経の末孫と我經ハ清和源氏の嫡流たるも
清和の清の二字せりて清の代といふも切楠河内
判官正成が揚州清河にて自害せり討討三季
小句ひて生かさず死せり北朝へ怒を寄せて置く
ゆききりしつとあんげりて室氏の駿馬新法と
いふ書籍のゆききりて居りていふと。清和の
孔明我朝の楠と人よくは突て二入とも小句
づひの人物と居りりあづりしきりり孔明と

楠といふ月夜と龍ほど遠くてたとえ孔明が大名
あり楠は只経づひの人物とて我いんとあり
大手記に生かす死せり七生界の間怒をあさで置く
ゆききりしつとあんげりて室氏の駿馬新法と
いふ書籍のゆききりて居りていふと。清和の
孔明我朝の楠と人よくは突て二入とも小句
づひの人物と居りりあづりしきりり孔明と

大八生明一

まぐら器の扱小人^{玉亮}の撰^{五雜}小人^{古今}の撰^今に於て免^人と通^人とを以^し
大傳^ととて受^てい^ふやう^にも^し太平記^に玄奘^{法師}の撰^作の撰^しと^えい^ひ
傳^ふむ^し玄奘^{法師}の撰^作の撰^しと^えい^ひも^し里^衣と^えい^ひ
川^合秋^の街^へて^正成^の撰^作の撰^しと^えい^ひも^し死^お替^り生^かり^の
一^句を^多く^ゆき^のや^らん^にも^し玄^奘法師^の撰^作の撰^しと^えい^ひ
又^ハ多^ク羽^織が^作も^せよ^のあ^らわ^るて^は流^流砲^{とも}空^空
流^流砲^{とも}い^くれ^きよ^ふし^の撰^作の撰^しと^えい^ひも^し玄^奘
小^玄也^もも^の前^に撰^作の撰^しと^えい^ひも^し昌^黎文集^の撰^作
と^えい^ひも^し玄^奘法師^の撰^作の撰^しと^えい^ひも^し漢^の撰^作
也^もも^の撰^作の撰^しと^えい^ひも^し玄^奘法師^の撰^作
の大^畧器^の撰^作の撰^しと^えい^ひも^し教^下て^少兒^童の撰^作
の撰^作の撰^しと^えい^ひも^し玄^奘法師^の撰^作

柳^との撰^作の撰^しと^えい^ひも^し玄^奘法師^の撰^作
玄^奘法師^の撰^作の撰^しと^えい^ひも^し玄^奘法師^の撰^作
死^お替^りの撰^作の撰^しと^えい^ひも^し玄^奘法師^の撰^作
ほ^のの撰^作の撰^しと^えい^ひも^し玄^奘法師^の撰^作
て^あり^の撰^作の撰^しと^えい^ひも^し玄^奘法師^の撰^作
し^たり^の撰^作の撰^しと^えい^ひも^し玄^奘法師^の撰^作
り^の撰^作の撰^しと^えい^ひも^し玄^奘法師^の撰^作
か^の撰^作の撰^しと^えい^ひも^し玄^奘法師^の撰^作
後^りの撰^作の撰^しと^えい^ひも^し玄^奘法師^の撰^作
の撰^作の撰^しと^えい^ひも^し玄^奘法師^の撰^作

さうりとそい遠然千あり一向根葉もぬきいひせと忍作り
 のひて法學の人らからしむるも毎年のよふ不徳者
 も中忠臣義の戯傳ハハるるをも塩治判官が切腹の
 時とつゝおまがきせいつたてりしりひのまき実より
 就中某七ツ頭の牛小宗りて大東老毛とあり又
 鬼女とあり舊衣を被るもふんれんかんとす
 ハ詔歌もありいへんて老毛とありのふ怒阿んや且
 又老毛とふ人もまあるきうぬ若し追ひつらハおのづか
 狐狸の怪物とせせおまありし鬼女おつきて老毛ふ
 おふんれんふと修馬ふおきておくの社壇あど小堀
 おくのさうりとハお海りしものこと毎門人たり

鳴一のふとあんを檢光の時大江山おふたり盗
 人の頭酒吞童子も老光おまの鬼の首せりて
 びひておまの逆産せけいお小あれり今おとも酒を
 飲み女せまのめや酒吞童子ハ酒問をとあり鬼
 殺と酒を作り出ハ酒のり店も張ひ鴨の池
 ぶひのふしふて出たハ女師をとおくお出せ
 り。いひのちの鬼殺と酒を切て遠く出せしと
 お今保お記録者が角の生トたるおまありし鬼
 としえおあふおまありしおまおまありし鬼
 者と鬼とあり又おまありし老女せもおまありし
 安達ヶ原の旧塚おまおまありしおまおまありし老女のこと

又山谷の木の精が合して妖怪とす
 ちのとも鬼とふをうゝ又鬼神とふりハきま
 くさふとをさそはるゝ又鬼神とふりハきま
 惡來として生る虎と列衣ほどの剛力ものもげた
 道來又諺語小鼻湯舟とる陸地ハ大松を推
 やる人もけ國の遠道不遠來り今をハカをらして
 他への旅人どもせうでえを物とありて世に後り悪業
小鼻ハ夏右相ハさるふと せ外樊吟項羽や張良韓信が
春秋はふらううたふ 事あつてけらろ死ふの胡乱多入くハきまハ道
 事あり道山の舟ハ張良もちと下邳の地橋り
 遊をハ癖なるもむぞもほはまてもおびて

今ハ昔石公がとらうゝ寓客とありて子どもの歌が育
 の紙職と書て毎日本中あぐも後とくをふ月の職
 小多く張良の龍頭小多りて寫とみり昔石公小指が
 一海鳥あきさそ蜀の関羽ハむして長刀の所とあり
 張飛ハさく今でも思ふ曲のあきさ敵はの光園
 羽や孔明の世話ハあるはきさ及び也外和清ハ智
 勇達一人ハ大畏地ハ小ありて今ハ安素とく
 之ハ君の妻とらうゝワサ入くのをと清りゆらとの
 年ハ冷る無人ハつらハ猫の前ハ小判馬の耳ハ
 風とふものてさるをさるのといつて龜ハさる冷
 るやちとゆらんハと頭ハさる甲の所ハ入ふり烈



大正四年五月



大正四年五月

子ハ衆の物徳を愛して書籍のふふと能く其の徳の長
 であるして其の徳を以て其の徳の長とて其の徳の長
 勇猛剛力の人やけしきの王とて其の徳の長とて其の徳の長
 ハ其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 とて其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 勇力とて其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 和夜内といふれども其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 剛力の長とて其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 勇力や其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 中人教を傳ふるをも其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長

和夜内が甲の州摺せ久しかり其の徳の長とて其の徳の長
 後を去るは其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 和夜内が領首とて其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 今もてハ山谷迷宮ホカケ入て其の徳の長とて其の徳の長
 ありて世も其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 百人力も其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 小徳ら其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 の自徳ハ其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長
 其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長とて其の徳の長

終に教訓のありしを西虎闘の二つありて死す
 のは理ありけりも世に之を年々言きし治りきり
 一はさかく女の世の中と信ふふ事あり巴沙前と云る
 美老女九十一歳まで日おひおほりて今時そ
 の女帝と云ふ教なりしを一はく信ふ能はれり
 一はく信ふ能はれりて勇力附と云ふこと故人附
 と云ふ事小冊子と云ふ事子小冊子と云ふ事
 天竺の事及ぶ事相傳ふ名有り智勇を乞ふ人ハ
 一はく小冊子に記し有り子ハ信ふ事勇力附
 と云ふ事ありて世に信ふ事いさぎやくと云ふ
 大酒公評いさく信ふ書籍の見直し海にあり

六經の書と云ふ事古くは信ふ事と云ふ事のりかも有り
 されとも信ふ事の上歴史と云ふ事新書等の次第を考
 ときハ見解の一助ともあり信ふ事又力に信ふ事
 一は信ふ事も信ふ事ありてこれ人ハ信ふ事力量
 ハ性質の二種と云ふ事信ふ事ありて人ハ信ふ事
 一は信ふ事ありてありてありてありてありてありて
 自力で自負し争闘と云ふ事信ふ事ありてありてありて
 弱有者と云ふ事信ふ事ありてありてありてありてありて
 弱人の怨と云ふ事信ふ事ありてありてありてありてありて
 えて己の功名と思ひ信ふ事ありてありてありてありてありて
 ありてありてありてありてありてありてありてありてありて

の勢出ておれをさし割一一人力千人の力があつても
まを打伏せんと縛られ己が力返ても害あつたの
程とあり孟子が寡無敵を危ういふとあり
そあり一人の力が百千人の力に勝たぬんや
孰中一男をある人の力にくちて剛柔人と肩とせ
ぬ人ハ力と害あつた速に力量の人もあつた
能く考へ終らぬ一孔子も暴虎馮河に死して
悔あつたのハ我ハあふせよとのひしと一

大上品國

聖子大上品國へ来て國門の内へ入るる人

の形容を恭つる色ありて進来たるひ小はと讓
神を國門の傍に高れ掲げ其文小曰此國小
君ハその國王の規矩を堅く相守りとせよ教
り我ハ一己の身は父母の身とせよ父母の身は
我ハ父母の身とせよ父母の身は我ハ父母の
身とせよ法を干非我非乃のりせよ一して刑戮
と蒙り我ハ我の身と毀ひ傷るるものハ大不孝大罪
とありて己の身は我の身とせよ我の身は我の
父母の身とせよ我の父母の身は我の父母の身
他人の身とせよ他人の身は他人の身とせよ大罪大不孝の名

と先んや抑は然れども、
 同セざるを乃不ふく己多欲ハシて出送せよのみ、
 不為り大酒淫色と考り、
 かくしてそり、
 の令限財寶と欺奪ハ又人のさふく、
 犯して盜賊と考す、
 尺刃のハ、
 親族縁者の罪限なぐき、
 されば一舉せると、
 父母不幸と考り、
 又姉と致ハす妹と考り、
 親に於て、
 又母のハ、
 又姉と致ハす妹と考り、
 親に於て、

そ一他人と誘セ、
 小後又さふふん、
 求ム。一、
 擧て、
 の大患難七條あり、
 右七條の、
 救ム。一、
 病の難に、
 小難なるもの、
 難小遊ハたるもの、

乃其の愚維のい七を除の能ふ遠の何人何の八親族
 朋友打集しまつとありふ救ふ能きり又法苑の作紀
 たるもの八人の長所なりり明るはず法苑の作紀
 のことふゆらさればと法苑の甲乙小因てそれふ其責
 此れゆら下るもと安小聖を能きりむと今
 きつと穿鑿するゆらり之九一家くの年中の事ハ
 之分派小並一色不及あり其能きりり存し厚く
 明くおんげゆき者也と書紀てゆり。列子矢まに
 此出ー救多ゆる箇原のうちに救濟するゆりのこと男池
 くるをりしきりし記さびかるとぶらり一村く小丁富ふ

書記ゆれば矩規を知らざるものゆり大少童も情ふに
 實りる智子のいろはに暗痛がらり。余け余生一人
 小罪人とするあり。法苑は論春闘りやどきてあり
 人の心減ふと又花の月のうら。圓小一玉和熟しそ外も
 角走りりねー余上齒といつゆらーさる理の
 本具ハ古書ふもゆるらり十分が一の定ふしとふれど獻
 事りえ余とたりの人小奢後とゆりありかくとに能ふ
 り或一あれハ不益の費とゆりあり。年中の入りたる
 是々愚論落ふ百餘は君与小聖んと何れもふれらん
 列子ハこれの文せえり。絶俗の事書紀にゆり。

其初の文はいさく天下二人の天下小何れを天下の
 天下也と大公望の教をすべし此を以て見てとらる
 後の文ハ漢をともけし君の人となり清らげゆの
 ほども明かふゆりたり漢やふくくの七聖人
 かも者かすしきと感懐して清きふ向ひて
 いさく紙は年月法を以て通達をり海のあふゆ
 を何卒に有の國ふりる規矩丸信を以て
 國へ入り初生を集教守せんよと教ふ思かき思ひ
 をたし今け國ふりて漢小規矩丸君臣上
 下の風俗を以てとらる地を以てゆきゆき紙は
 國邊鄙のあふ今書あし箇際を祖述とす

り紙ふ於て不きかし今と二を至るゆふくと夫
 ろる恩恵不かり辱しきゆのあり云際不きし。し。
 とそのもの義不我あつの入りはを我と清く清くはけよも
 あき芳志あはん恩恵不我あつたゆきあはゆきあは
 せし一清き二子の紙を造りて目出度席ふせひ
 出せ清き巻の上へ看をたり種々の滋味紙巻て
 糸る巻し一具又人の紙を福目とすゆきゆき
 同て二子の年あふゆきあふゆきあふゆきあふゆき
 宮しありの飛鳥ふはき二子の紙を畫写して法人
 の守とすゆきゆき一ゆきゆきお遠き巻あふゆきゆき
 きといはれはる清き一礼し我くが身ふりゆきゆき

中懐のちり人々の以東を命長久富貴万福
 亦内安を子孫無自祈のれ毎半宵代く
 子子た病大夫急変といふ方威を治すの人家く
 せよと願一是系お遠河のすいと果相をひい
 いれぎの願一と病と急と六代りく小列子を打
 ぶせはほとく列子が在國界不老山の麓延安
 川の遠あり万平をとふち湯茶をとりけふ
 して病急不病一してはきぬ名残の誰杯あ良
 智くおわたり一病急を色がば玉海引いとん烈
 子ハこれ分獨歩して系ふかとあり秋信家一海しと
 おそえく一が松吹ゆとを病とも小一羽の愛はえん

ち。煙前ふお茶器を並べて僅四が契茶の煙しと
 せたり。列子ハおそえと伸一なる欠ニツニツしと
 羨申の以背を熱思ひるふ。妙人交盧をかん一
 邯鄲の愛ハ又十年の榮耀繁華集のらあを信極
 あ一。我がえ一。羨ハ方一。流人の教とも又ハ切告
 懲烈の山隘ともあり。願きしり。せ得たりと志感一
 我ん。羨の祈を正写小書留。それハ我が号を羨申
 教人も古ふ教多あり。が病急茶と号一。長く初を
 小教授して後くハ王公貴人へ出入せざるといふも
 く。ま。その教せよ。ま。身命をえ。ふ。前。の。ら。一。富。貴。家
 安ふ。ふ。子。孫。無。自。祈。の。れ。毎。半。宵。代。く。

天明二壬寅歲正月吉且

烏丸通高辻上所

皇都書肆

河南儀兵衛

骨古雜籍
玲書鋪
威亨堂

Handwritten notes and a small paper fragment on the left page, including some illegible characters and a red mark.

